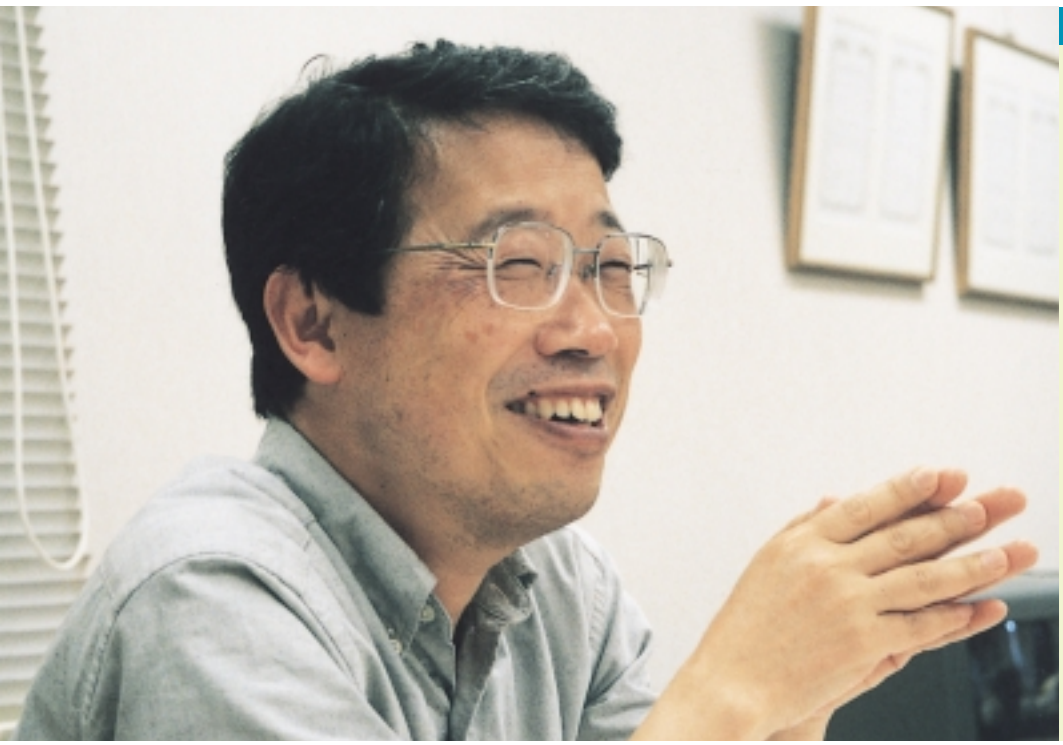
INTERVIEW
教授に聴く
研究

柳田國男を書くために
ー指導いただいた先生方との関係ー



■ プロフィール

大学院現代社会文化研究科
地域社会形成論専攻地域社会論大講座
藤井　隆至 教授
FUJII Takashi
専門分野：日本経済文化論
研究課題：近代日本の経済思想

経済学博士。1949年生まれ。1967年東京大学入学、1971年同大学大学院経済学研究科入学。1980年新潟大学に着任。経済学部長を経て、2001年より大学院現代社会文化研究科長。1989年に経済学部で「一日体験入学」（現在のオープンキャンパスに相当）を企画、NHKの全国ニュースで放映され、数年で全国の大学に普及する。

同じ先生の授業を何年も聴いていると、学問の奥の深さが伝わってきます。

――藤井先生の研究というと、まず柳田國男です。経済畑の藤井先生が、どのような方法で柳田國男を研究してこられたのかお聞かせ下さい。

柳田國男についてたくさん書いてきましたが、代表作は『柳田國男　経世済民の学――経済・倫理・教育』です。この本を書くために、何人もの先生からご指導をいただきました。きょうは、そうした先生方との関係をお話させていただきましょう。

――ご本の副題に「経済・倫理・教育」とありますが、「民俗」はないのですね。

柳田の学問は「経世済民の学」であり、その体系は経済学・倫理学・教育学が論理的に結びついている、というのが私の説です。いいかえれば、民俗学と理解するのは誤解だという説でもあります。「経済」は関口尚志先生の経済学、「倫理」は佐藤俊夫先生の倫理学、「教育」は大田堯先生の教育学が基礎になっています。しかし私なりに換骨奪胎してあります。

柳田國男は人文科学・社会科学にまたがる広大な領域の学問を開拓した人ですが、その学問を重心の位置で支えているのは倫理学です。柳田國男の学問は倫理学であって民俗学ではない、この柳田理解は、教養時代に佐藤先生の「倫理学」を聴講したのがヒントになっています。新潟大学でいえば、全学共通科目の位置にある科目でした。

佐藤先生は和辻哲郎の教え子で、和辻倫理学を発展させようとしておられました。授業では、佐藤先生の『倫理学』『習俗』と和辻の『人間の学としての倫理学』を使いました。「習俗は倫理の基底をなす」というお考えで授業を進めておられました。カント哲学の用語は私にはチンプンカンプンでしたが、先生のお話には不思議な魅力があって、いつまでも心に残っていました。大学院生

柳田國男を読みあぐねて苦悶していたとき、ハッとひらめくものがあり、「これは倫理学なんだ！」と気が付きました。

のとき、柳田國男を読みあぐねて苦悶していたとき、ハッとひらめくものがあり、「これは倫理学なんだ！」と気が付きました。それから、佐藤先生のご本を何度も読み返しました。

――柳田國男を研究することに決めたのはいつですか。

経済の大学院入試に合格してからです。私は大学2年のときに学園紛争を経験した紛争世代に属しています。3年生になって西洋経済史の関口尚志先生の演習に参加しました。関口先生は大塚久雄先生の教え子で、演習ではマックス･ウェーバーの宗教社会学を中心に勉強しました。ウェーバーの著作やウェーバーについての研究書をたくさん読みました。

柳田國男は経済学でも大きな仕事をしていますし、もともと私は宗教社会学を勉強していたものですから、経済の大学院で柳田國男を研究することにそれほどの違和はありませんでした。当時の東大経済の大学院は指導教官制が廃止されていて、学生は全員が一匹狼にされていました。指導教官制が存在していれば、当然ダメと言われていたと思います。経済学部の先生で、柳田國男について指導できる人はいませんでしたから。

しかし逆説めいていますが、指導教官制が廃止されていたおかげで、私は多くの先生から、学問の面でも人間の面でも、懇切な指導を受けることができました。大学院では関口先生のところで引き続きウェーバー中心の勉強を続けていましたが、そのほか、ここでは、教育学の大田堯先生と民俗学の宮田登先生のお名前をあげさせていただきます。

――お二人とも他大学・他学部の先生ですが、どのようにして勉強したのですか。

大田先生の場合、修士課程2年のときから先生が退職なさるまで、4年間にわたって教育学の大学院の授業に出席しました。とりわけ大田先生からは、人間形成の面でも深い影響を受けています。大田先生のお声に接することができただけでも、柳田を研究してよかったと思っています。

4年間も大田先生の授業に出席していたのは、単位の取得と関係なかったからです。最初の1年は他研究科聴講で単位を取りましたが、それ以降は“盗聴”といって、聴講手続きと関係なく、一方的に聴講していました。いってみれば、押しかけ学生です。

「柳田國男　経世済民の学ー経済・倫理・教育ー」（藤井隆至著／名古屋大学出版会）
絵：和田英作「渡頭の夕暮」
文字：石川九楊

大学・学部は関係なく、“聴きたい授業を聴きたい”“もっと深く知りたい”。誰もがアナーキーになるほど閉塞した学生時代でした。

――盗聴というのは、先生の命名なのですか。

いいえ。私の周辺の人はみんなそのように呼んでいました。学園紛争が終わったあと、若者たちは学問に活路を求め、いろいろな試行錯誤を続けました。そのひとつが盗聴と呼ばれた勉強の仕方でした。もちろん教員側も、そのような制度外の学生を快く受入れていました。関口先生の授業にも、社会学や政治学の学生・院生が盗聴に来ていました。

法政大学の外間守善先生の授業を1年間盗聴したことがあります。「沖縄文学論」でした。あるとき、外間先生が、私たち学生を沖縄料理店に連れて行ってくれました。食事のあと、学生だけで喫茶店に入り、そこではじめて自己紹介したのですが、なんと、半数以上の学生が盗聴学生でした。大学・学部は関係なく、“聴きたい授業を聴きたい”“もっと深く知りたい”、そういう純粋な動機で盗聴したのです。誰もがアナーキーになるほど閉塞した時代でした。

――宮田先生の授業も盗聴だったのですか。

そうです。民俗学を勉強するために、東京教育大学の竹田旦先生の大学院の授業を盗聴しに行きました。他大学でもあり、竹田先生に学部の授業を盗聴させてほしいとお願いしたのですが、大学院の授業に出席するよう勧めてくださいました。おかげで福田アジオさんはじめ、民俗学専攻の何人かの大学院生と知り合うことができ、その後の私にとって大きなプラスとなっています。当時、宮田先生は助手でした。

東京教育大学が廃校になったあと、宮田先生は筑波大学に移られ、東大文学部へ非常勤講師として教えに来られました。ですから、ずいぶん長い期間にわたって盗聴してきたことになります。同じ先生の授業に何年も続けて出席していると、学

大学院現代社会文化研究科
藤井隆至教授

⬇経済学部演習風景

問の奥の深さのようなものが伝わってきますし、人間性の面でも強い感化を受けるようになってきます。私が新潟大学に赴任したあとも、個人的な指導は続きました。宮田先生には、新潟市の「市民講座」で民俗学の講座を私が企画したとき、講師として東京から来ていただいています。

――教育学の大田先生や民俗学の宮田先生など、ずいぶん幅広い指導を受けてこられたのですね。先生のお仕事をお伺いしていますと、自分が求めるテーマをひたすら追求してこられたという印象を受けます。「教養」本来のあり方を感じさせます。

そうかも知れません。私の場合、今風のことばを借りると、“自分さがし”と結びついています。学際性を帯びているのはそのためです。学園紛争が全面敗北したあとを受け、自分の研究を追求すること自体が自分さがしとなっていました。知識の修得が人間形成と結びついている点では、私の研究スタイルは「教養」的かも知れません。

ただ、いうまでもないことですが、「教養とは何か」を考えて勉強してきたわけではありません。私はたんに、心の渇きを満たすために勉強しただけです。大学院時代のことですが、「飢え死にした院生はいない」という言葉が上級生から下級生に語り継がれていました。目先の損得にまどわされることなく、初心を貫くためにトコトンがんばれ、という意味で、私はその基本を守っただけです。結果として「教養」に近いものが生まれ出た、というところでしょうか。

大学院時代のことですが、「飢え死にした院生はいない」という言葉が上級生から下級生に語り継がれていました。